

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

「異端」の人文学

A Study of Heterodoxy from Multiple Perspectives

2. 研究代表者氏名

石井 美保・向井 佑介

ISHII, Miho / MUKAI, Yusuke

3. 研究期間

2024年4月-2027年3月(1年目)

4. 研究目的

人文社会科学において、「異端」は思想・宗教・芸術・科学をはじめとする幅広い領域を含む重要な研究テーマであり続けてきた。たとえば思想史においては丸山真男を中心とした「正統と異端」研究会の存在や、歴史学と人類学ではカルロ・ギンズブルクやタラル・アサドラによる異端研究が挙げられるが、人文科学研究所においても1970年代に旧西洋部・日本部・東方部の研究者たちによって「異端運動の研究」研究班が組織され、その成果として1974年に会田雄次と中村賢二郎を編者として『異端運動の研究』が刊行されている。これらの研究の蓄積を踏まえた上で、本研究班では、東方部と人文部の若手・中堅研究者が中心となり、それぞれの研究領域を「異端」という切り口から捉え直すことを試みる。そこで検討されるテーマは、たとえば隋・唐時代に「異法」として弾圧の対象となった三階教、漢代以降の儒教規範の周辺にあって独自の発展を遂げた宗教的建築物と祭祀、17・18世紀フランスにおけるジャンセニスム、植民地期アフリカにおける「魔女」の告発と弾圧、科学的農業のオルタナティブとしての有機農業の展開、日本の社会運動におけるイデオロギー対立に至るまで多岐にわたる。このように地域的にも時代的にも幅広い領域における多様な「異端」のありようを検討することで、本研究班はそれぞれの事例の独自性とそれらに通底する普遍性を探究するとともに、正統と異端、権力と周辺の間存する排除と包摂、対立と相互依存といった緊張関係の様相を多角的に明らかにする。さらに本研究班は、共同研究班における活発な議論と対話を通して、両部の若手・中堅研究者がそれぞれの研究に関する相互理解を深め、これからの人文学のあり方をともに考えていくための基盤となることを目指している。

In the humanities and social sciences, heterodoxy has been an important research theme that encompasses a wide range of fields, including religion, philosophy, art, and science. For

example, , in the history of ideas, Masao Maruyama organized a study group on orthodoxy and heterodoxy , and in history and anthropology, Carlo Ginzburg and Talal Asad have conducted research on heterodoxy. In the 1970s, researchers from the departments of the Humanities, Japanese Studies, and Oriental Studies of our Institute formed a research group on heterodox movements. As a result of this research, in 1974, a volume entitled Research on the Heterodox Movements edited by Yuji Aida and Kenjiro Nakamura was published. Based on these previous studies, in this research group, led by young and mid-career researchers from the departments of Humanities and Oriental Studies, we embarked on a reconsideration of our respective research fields from the perspective of heterodoxy . The topics considered by this research group are wide-ranging. They include but are not limited to: Sangai-kyo (Sanjiejao), which was suppressed as “heterodox” during the Sui and Tang dynasties, the stupas and rituals that developed independently on the periphery of Confucian norms from the Han dynasty onwards, Jansenism in France in the 17th and 18th century, accusations of witchcraft in colonial Africa , the development of organic agriculture as an alternative to scientific agriculture, and ideological conflicts in social movements in Japan. By examining various forms of heterodoxy in a wide range of regional and temporal contexts, we will explore the uniqueness of each case as well as the universality underlying them. At the same time, we will shed light on aspects of the tensions that exist between orthodoxy and heterodoxy, exclusion and inclusion, conflict and interdependence, and between centralized power and its periphery. Furthermore, this research group aims to serve as a foundation for deepening mutual understanding of our respective research areas and to collectively consider the future direction of the humanities through lively discussion and dialogue.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は、5回の研究会を実施した。第1回の中西報告では、20世紀中国において異端視されたムスリムのスーフィー集団に焦点をあて、その一派の導師・馬震武がアラビア語聖者伝のなかでいかに語られたかが論じられた。第2回の藤原報告は、合理化を進める正統的な近代農業に対し、異端ともいえるべき有機農業がいかにして登場したのかを、ナチス・ドイツやインド、日本の事例をもとに論じた。第3回の向井報告では、外来宗教であった異端としての仏教が、いかにして中国社会に浸透していったのかを、初期仏教寺院の構造や仏像の造形などをもとに考察した。第4回の石井報告では、南インドの祭祀をとりあげ、正統と位置づけられるサンスクリット的なヒンドゥー祭祀とは差異化される、在来のブータ祭祀の異端性を指摘した。第5回の平岡報告は、近世初期にイエズス会宣教師が伝えた南蛮系宇宙論に対し、日本の知識人たちがどのように反応したのかを論じた。各回、さまざまな視点から、活発で有意義な議論が交わされた。

2024.4.5 弁解的な奇跡——アラビア語聖者伝の中の馬震武と中国共産党 発表者 中西竜也

2024.9.25 異端はどのようにして受け容れられたか——中国における仏教の受容と変容
発表者 向井佑介

2025.3.26 ヨーロッパ科学の伝来と近世日本——南蛮系宇宙論を中心に 発表者 平岡隆二

なし

所内

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	16 (3)	0 (0)	2 (1)	1 (1)	0 (0)	66 (13)	0 (0)	6 (4)	4 (4)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
国立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	1	16 (3)	0 (0)	2 (1)	1 (1)	0 (0)	66 (13)	0 (0)	6 (4)	4 (4)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 次年度の研究実施計画

研究班2年目となる次年度も、対面方式により5～6回の研究会開催を予定している。今年度に引き続き、毎回一人の班員が研究報告をおこない、それをもとに参加者全員で討論する形式により、共同研究を進めていく。まず、科学史の方面からみた異端の事例についての報告・検討を予定している。そのほか、西洋では音楽史やフランス文学・哲学、中国では文学・仏教史・絵画史・音韻史、日本では近現代の語学教育など、各方面からの研究報告を準備している。それら個別の研究を深め、成果を蓄積し、知見を共有するとともに、「異端」の概念の整理も進めていく。最終年度に向けての研究成果のとりまとめ、それをふまえたシンポジウム等の開催、論文集の刊行を目標として、着実に準備を進めていく予定である。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は今年度に引き続き、定例研究会での班員による報告を主体として共同研究を進める。研究会での報告と討論をふまえて、個々の研究をさらに発展させ、論文にまとめ、最終年度以降に刊行する論文集に掲載する予定であり、また必要に応じて紀要や学術雑誌に投稿する。個別の研究報告をふまえて研究班の総括や「異端」概念の整理も進め、その成果は次年度以降、人文研アカデミーのシンポジウム・座談会等を利用して、公開していく予定である。